六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

石川直樹　写真家

Naoki Ishikawa / Photographer

CREATOR INTERVIEW No 155

石川 直樹　Naoki Ishikawa

1977年東京都渋谷区生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。人類学、民俗学などの領域に関心を持ち、辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、作品を発表し続けている。2008年『NEW　DIMENSION』（赤々舎）、『POLAR』（リトルモア）により日本写真協会賞新人賞、講談社出版文化賞。2011年『CORONA』（青土社）により土門拳賞。2020年『EVEREST』(CCCメディアハウス）、『まれびと』（小学館）により日本写真協会賞作家賞を受賞した。著書に、開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』（集英社）、『地上に星座をつくる』（新潮社）ほか。 主な個展に『JAPONÉSIA』ジャパンハウス サンパウロ、オスカーニーマイヤー美術館（ブラジル/2020-2021）。『この星の光の地図を写す』水戸芸術館、新潟市美術館、市原湖畔美術館、高知県立美術館、北九州市立美術館、東京オペラシティアートギャラリー（2016-2019）。『K2』CHANEL NEXUS HALL（東京/2015）、『ARCHIPELAGO』沖縄県立美術館（沖縄/2010）など。作品は、東京都現代美術館、東京都写真美術館、横浜美術館、沖縄県立美術館等に収蔵されている。最新刊に『Kangchenjunga』（POST-FAKE）、『Manaslu 2022 edition』（SLANT）など。

NO 155

石川直樹 写真家

NAOKI ISHIKAWA / Photographer

常に未知な何かと出会えるように感覚を開いておく。

クリエイターインタビュー

「自分だけの尺度で街の新しい地図をつくってみる」

published_2024.03.06 / photo_tada / text_akiko miyaura

世界中を旅しながら、都市の混沌から極限の自然環境まで、同時代の地球を縦横に記録してきた石川直樹さん。14 座ある 8,000m 以上の高峰のうち、13 座の登頂に成功し、最後の山へ向かう遠征目前です（取材時）。今回は、世界各地を目まぐるしく移動し、撮影を続けてきた石川さんが体得した旅先の土地や人々との向き合い方や、厳しい環境下で順応することの意味、そして誰もが気軽に撮影できるようになった写真の未来についてお話を伺いました。

雑然とした群衆に紛れることの安心感。

六本木は、僕にとって案外馴染みのある街なんです。国立新美術館の展示を見るために足を運ぶことも多いですし、昔、西麻布にあったプロラボに毎日のように通ってフィルムの現像やプリントをしていた時期もあります。今は乃木坂にある別のラボによく行きますが、その時も六本木駅から歩いたりして。それから、六本木交差点近くのルノアールで仕事をすると、すごくはかどるんですよ。いろいろな職種の人がいろいろなことを話している、その会話がちょうどいい BGM になって、「みんな生きているなあ」とどこか安心する（笑）。海外にいる時はたくさんいる雑多な人々の中に溶け込んでいるけど、生まれ育った東京だと顔馴染みの人や行きつけの店とかがあるじゃないですか。すると、どうしても他人に気づかれるから、雑然とした場所で群衆の中にいることに逆に安心感を覚えるんです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

その昔、東京に雪が降った日、六本木の交差点を行き交う人をひたすら撮影したこともありました。どんな人が来るか、どんな動きをするかも読めない、そういう自分の意志ではコントロールできない状況が好きなんです。コロナ禍中は、2年間ずっと渋谷でネズミの写真を撮っていたのですが、まさにネズミも動きが読めないから面白かった。それらの写真は、『STREETS ARE MINE』という1冊にまとめましたが、六本木のネズミにもちょっと興味はあります（笑）。僕は思い通りにならないものに惹かれるし、偶然に出会いたいという思いが強い。写真って、そういう意図しないものを呼び寄せてしまうメディアでありますよね。

STREETS ARE MINE

2020年から2021年にかけて、石川さんが撮影した東京の街を記録。COVID19や緊急事態宣言、東京オリンピック、再開発……と、目まぐるしく変化する時代を捉えた写真集。カミュの『ペスト』に着想を得て渋谷の街の撮影を始め、非日常の路上を舞台にパンデミック下を生きる人々と、跳梁するネズミたちを捉えた。

想像を超えた出会いに遭遇したい。

偶然を大切にするのは、旅も同じ。旅は、人だけじゃなく、様々なモノや風景や歴史や文化と出会い、発見することだと思っています。自分にとっての未知の存在に出会い、身体で理解していきたい、と常に考えています。今の時代は分からないことがあると、スマホですぐ検索をして知ったつもりになっちゃうじゃないですか。でも僕は、自分の想像を超えたものに出会い、手触りを確かめながら自分の実感として咀嚼していく、世界のことを理解していくということを死ぬまで続けたい。それが、旅の本質じゃないかと思うんです。だから、旅先ではいつも「何でも見てみよう」という気持ちでいます。そこに行く大きな目的はあったとしても、そこにしがみつくわけじゃない。とにかく街の隅から隅まであらゆるものを見て、何かに反応して写真を撮りたいんです。

コロナ禍中はなかなか旅に出られず、山に登ることもできなかったのですが、2022 年はダウラギリ、カンチェンジュンガ、K2、ブロードピーク、2023 年はアンナプルナ、ナンガパルバット、ガッシャ―ブルムⅠ峰と、各年4つの山に登頂しました。自分の中で“チョロ Q 現象”って呼んでいるんですけど（笑）、2年間ずっとゼンマイが巻かれていて、それがコロナ禍が終わってポンッと勢いよく飛び出した感じで。高所登山を知らない方からすると、短い期間にそんなに高い山にいっぱい登るなんて、大変だって思うじゃないですか。でも、身体が高地に一度順応すると、連続で登った方が楽なんですよ。1 年に 1 回の遠征だと、そのたびに順応しなきゃいけないけど、順応した状態なら山に着いてから案外サクサクと登れます。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2024.03.06 / photo_tada / text_akiko miyaura

旅人は常に異邦人。自分の価値観を持ち込まない。

頂上で「〇〇の山の頂上に立つことができて嬉しいです」などと言いながら自撮りした動画があるんですが、友人に見せると「嬉しそうに見えないね」って、よく言われるんです。僕の中ではめちゃくちゃ喜びを感じているのに、どうやら伝わりづらいみたいで（笑）。僕自身の表情では伝えられないかもしれませんが、ヒマラヤの 8,000mを越える山々って本当にすごいんですよ。あれは遠くからじゃなく、ぜひ間近で一度見てもらいたい。簡単ではないかもしれませんが、できるなら標高 5,000mのベースキャンプあたりから見てもらいたいなあ、といつも思います。K2 やアンナプルナを間近で見ると、「なんだ、この巨大な塊は!」、「これが山なのか!?」って大きな衝撃を受けると思います。

エベレスト遠征などのスタート地点になる街、ネパールのカトマンズは僕が世界で一番好きなところです。街も人で賑わっていて、いろんな国の料理が食べられるし、人も犬もみんな好き勝手に生きている感じがいいんですよ。雑然としていて、路地の一つひとつに人の生き方が垣間見えるのも好きです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

そうやって異文化の街へ行った際、現地で大切にするのは“郷に入っては郷に従え”の姿勢。旅人は常に異邦人で、向こうのコミュニティーに入らせてもらう立場なので、できる限りそこにいる人を尊重したい。だから、現地の文化に触れて、理解しようとする姿勢は、重要ですね。例えば、以前行った太平洋の小さな島では、みんながふんどしで生活していたので自分も同じようにふんどしで過ごし、その土地の人たちが食べているものを食べていた。それはアフガニスタンに行っても北極圏に行っても同じです。自分の価値観や常識を、頑なに持ち込むことは決してしないようにしています。

知っているつもりになっていないか？

旅もそうですが、新鮮な発見を得るためには、“知っているつもりにならない”ことが大切だと思います。先ほども少し話しましたが、何でもスマホで検索して分かったと思ってしまうと、周りに興味がなくなってしまう。例えば、今、僕の目の前にあるペットボトルには水が入っていて、その隣にあるのが紙切れで、それらが乗っているのが机ですよね。僕はこれらを分かっているつもりになっているから、何も反応をしない。しないというより、反応しようがない。でも、この水や紙、机などを初めて見た赤ちゃんは、「これは何だろう」と触ってみたり、舐めてみたり、紙を破ってみたりしながら世界を理解していく。そうやって反応できることは、すごく幸せなことなんじゃないか、とも思います。

年を重ねると、「今年も1年早かった」なんてよく言うじゃないですか。でも、それを言う人の多くはサラリーマンなどの大人たちで、子どもは一切言わない。ルーティンワークを続けている大人は、気づきや発見が少ないし、まわりの新しいことに関心をもたないから、時間が矢のように過ぎ去っていくんだと思います。一番の理想は、常に生まれたばかりのような状態で、世界と向き合うこと。でも、現実的にそれはすごく難しい。年を取っていくとみんなあらゆることを知っているつもりになって、反応しなくなってしまう。それを避けるためには、「知っているつもりにならない」ということを、頭の中に常に留め置くしかないんでしょうね。

みんな自分だけの街の地図を持っている。

僕の場合、旅先では歩いて動ける範囲から、街のスケールを把握している感じがあります。地図は情報量が多くて眺めるのが大好きなんですが、実際は異なる縮尺の自分だけの地図みたいなものを、みんなそれぞれが持っていると思うんです。例えば、僕が 17 歳の頃にインドに行った時、道に迷って現地のおばあちゃんに「ここに行きたいんだけど」って助けを求めたら、地図を書いてくれたんです。でも、その地図の通りに歩いているのに、全然目的地に着けなくて。なぜかと言ったら、それはおばあちゃんの記憶の地図だったから。要は通い慣れたよく知っている道はすごく大きく、短く書かれていて、逆に知らない道は細く、長めに書かれていた。実際の距離感や道の大きさと違うから、そりゃたどり着けないですよね（笑）。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

インドのおばあちゃんのように、みんなもなんとなく自分の縮尺や馴染みの道なんかで街を把握しているでしょう。子どもだったら、この路地を入ったところに変なキーホルダーが落ちていたとか、あの公園に行くと野良犬がいるから近づかない、みたいな地図がある。小説家の吉行淳之介は、『街角の煙草屋までの旅』というエッセイを書いていますが、近所の煙草屋まで行くのも旅と捉えていた。そういう人それぞれの縮尺で捉えた世界って、すごく面白いですよね。人だけじゃなく、犬には犬の世界があるでしょうし、虫には虫の世界がある。僕は歩きながら、自分が反応したもの全部を写真に撮っているけど、それらが、自分が歩いた世界の地図になればいいな、と思っています。僕の写真は、石川直樹の地図そのものなんだ、と。

街角の煙草屋までの旅

「家から一歩外に出れば旅だ」と考えるヘンリー・ミラーに共感し、街角の煙草屋まで行くのも旅だと考えて、自分の住む都会を歩き回る。角度を変えて見えてくる旅の意味や風景を、吉行淳之介氏の豊かな感性と想像力で綴ったエッセイ。

環境に順応し、クリエイティブになるために。

僕はまわりを変えるというより、自分を変えていくタイプだと思います。これまで 8,000ｍを越える山々を登ってきましたが、例えば、ヒマラヤではまわりの環境を変えることはできない。空気が薄ければ、その中でも動ける身体に順応するしかない。極地では寒くても暖房をつけて温まることなんてできないから、自分が寒さに強い身体になるとか、寒さに耐えられるようにしっかり装備するということしかできませんよね。そうやって、その場その場で自分が土地に順応していく、ということを実践してきました。

日常の暮らしも、同じだと思います。例えば、東京の街がクリエイティブであろうがなかろうが、自分がクリエイティブに生きていこうとすればいい。大人はそうやって意識さえあれば、自分の考えでどんな風にも動けるじゃないですか。でも、子どもは自分の思い通りに過ごすことはなかなか難しい。そう考えると、子どもたちにいろいろなきっかけを与えられる場が、都市にもっとあればいいなと思います。子どもたちにたくさんの可能性をつくることが、未来の街をクリエイティブにしていくことにつながるのではないでしょうか。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2024.03.06 / photo_tada / text_akiko miyaura

優れた本1冊を読み切ることは、ひとつの旅をしたことと同じ。

地方に行くと、子どものための施設に力を入れているところがたくさんあります。もちろん東京にもありますが、地方の施設はもっと広々と遊べるような場所が多い印象です。あるといいなと思うのは、子どもが遊べる図書館ですね。机が並んでいて、みんな読書をしたり、勉強しているからうるさくしちゃいけない、というのが今の図書館。それもいいんだけど、子どもたちがもっと探検しながら動き回れるような博物館と図書館と公園が一緒になったような場があればいいな、と。館内も平坦ではなく、足の裏で異世界を感じられるような坂道や丘のようなものがあっていい。アスレチックとまでは言わないけれど、体を動かしながら、時々本を読んだり、休んだり、野外に本を持ち出せてもいいんじゃないか。子ども向けの施設なのに、事前予約が必要だったりすると、がっくりするんですよね。だから、もっとラフに、子どもたちが冒険できるような場所があればいいなあと思います。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

僕は、幼い頃から本を読むのが好きで、読書によって自分の素地がつくられてきた、と感じています。今はスマホなどに時間をとられて読書量が減っているけれど、中高生の頃は暇があれば本を読んでいました。電車内で本を読むのに夢中になって、降りなきゃいけない駅を乗り越しちゃったことが何度もある。本を読むって、旅をするのと一緒だと思うんです。遠い場所まで行かずとも、優れた本に出会って1冊読み切れば、それはひとつの旅をしたことと同じ。そういう体験を子どもたちに、ぜひしてもらいたいですね。

六本木の芝生にテントを立て、昔の六本木に思いを馳せる。

僕は幼少期から東京で過ごしていますが、当時から自然に触れる場所はあまりなかったので、自然のフィールドで遊ぶことにすごく憧れがありました。中高生の夏休みは、アウトドアの学校などに参加したりして。高校生の時に、カヌーイストの野田知佑さんに出会ったのも大きかった。彼の本には、たくさんの影響を受けました。

自然に触れるための冒険合宿みたいなものは全国にあると思うのですが、六本木のような都心でも、何かしら子ども向けの学びのフィールドがつくれたらいいですね。例えば、ミッドタウンの芝生広場にテントを張って寝てみるだけでもいい。満月がこんなに明るいんだ、とか、暗闇って怖いんだな、日の出を迎えると暖かいんだ、という当たり前のことに触れる場になるといいですね。都市のど真ん中でテント泊って、僕もしたことがないから体験してみたいです。先ほどそれぞれの縮尺の地図があるという話をしましたけど、子どもたちと一緒に六本木の新しい地図をつくるのも楽しそうだなと思います。

そういった子ども向けの活動は、どんどんやっていきたいと思っています。あとは、8,000m峰 14 座のうち今 13 座まで登って写真を撮ってきたので、最後のひとつを登りたい。今年4月の登頂を目指しているので、このインタビューが公開される頃には、もしかしたらまたネパールにいるかもしれません。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2024.03.06 / photo_tada / text_akiko miyaura

投げられるボールをキャッチするように写真を撮り続けたい。

ヒマラヤでの撮影が近い目標だとすれば、ずっと先にある夢は宇宙で写真を撮ること。民間人でも宇宙船に搭乗できるようになってから、応募する気満々だったんですよ（笑）。でも、ヒマラヤ遠征と日程がかぶってしまって……。タイミングが合えばまたぜひ挑戦したいです。行ってみたいのは火星。標高約 24,000mのオリンポス山を間近で見てみたい。普段、僕が登っている 8,000m峰の3倍相当の高さと考えると、想像を超える光景なんだろうなとワクワクします。

オリンポス山

火星にある楯状火山で、太陽系最大とされ、高さは約24,000m、裾野の幅は約600kmと言われている。長らく死火山だと思われていたが、噴火した形跡なども発見されており、将来は噴火の可能性もあるかもしれないと言われている。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

そして、これからもフィルムで写真を撮っていきます。僕は、基本的に身体の反応で写真を撮る。例えば今、目の前に動物が出てきたら、僕は反射的に写真を撮るでしょう。「カッコいい」でも「面白い」でも「気持ち悪い」でも何でもいいんです。「なんだ、これ？」と体が反応したものを、ただ撮るというのがいいんですよね。

狙いをすまして撮って、きれいな写真になるのも素晴らしいことだけど、僕は想像を超えたものに出会って、それを受け止めるように撮りたいんです。あと、写真のワークショップなどでいつも言っているのですが、SNS のいいねは「どうでも “いいね”」のいいねだから、そこを目指すと写真がダメになっちゃう、と。「いいね」を押すのって、みんな結構適当じゃないですか。承認欲求が一瞬満たされて嬉しく感じるけど、結局は消費されて終わってしまう。

写真って、本来は時を止める魔法のような、すごく不思議なものだと思うんです。でも、SNS が普及して１日に何千万枚という写真が撮られている今、写真を撮ることが当たり前になりすぎて、みんな何とも思わなくなっていますよね。さらに AI とかも出てきて、何でもつくり出せる時代になってきた。だからこそ、僕はやっぱりフィルムで撮りたいな、と思います。光がもたらした化学反応で像が浮かび上がるわけで、コントロールできない何かが写真には常につきまとう。そうやって意図しない偶然と出会いながら、世界を記録することを僕はずっと続けていきたいと思っています。

撮影場所：国立新美術館

取材を終えて ……

取材現場にいらした石川さんは、ひょうひょうとしているけれど、とてもエネルギッシュで、飾らずありのまま、そこに存在している。余計なものがないからこそ、感覚が研ぎ澄まされ、目の前で起こる出来事に敏感に反応できるのだと納得しました。当たり前のようで難しい、" 分かったつもりにならない " こと。膨大な情報量に囲まれ、簡単に答えを知れる時代だからこそ、いつも心に置いておきたいとあらためて実感しました。14 座制覇の吉報を楽しみに待ちつつも、何よりご無事で戻っていらっしゃることを願わずにはいられません。（text_akiko miyaura）

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.